

〈資料ノート〉

「保育」の認識過程に関する研究（第二報）

民 秋 言・小 林 捷 哉

1. はじめに

本稿は、『『保育』の認識過程に関する研究』の中間報告（第二報）である。すでに、第一報として、『『保育』の認識過程に関する研究（その社会学的方法試論）——短大保育科学生を対象として——』（『白梅学園短期大学紀要』第16号，1980年所収）を発表している。本研究の目的や基本的枠組はこの論稿で述べている。したがって、ここでは研究の課題などを概説するにとどめる。

学生が短大保育科の二ヶ年の課程で、「保育」をどう捉え認識していくかを考えるのがこの研究の狙いである。このばあい、つぎの二つが問題となる。

第一は、学生が捉える「保育」の内容とは何か、どのような内容をもつものとして「保育」を捉えるのかである。第二は、この「保育」を学生はどのような契機により、またどのような段階を経てそれを理解し認識していくのかである。このように、本研究の課題は「保育」の内容と認識の過程という点をかかえている。

まず、内容（＝「保育」とは何か）についてであるが、ここでは「保育」を一般論ではなく、「職業」としての「保育」と規定している。したがって、「保育者」は「職業人」としての「保育者」となる。そこで、われわれの研究目的は、保育科学生の職業の社会化過程（socialization）を考察すると言い換えることもできる。

職業の概念については、尾高邦雄の「個性の発揮、連帯の実現及び生計の維持を目指す・人間の継続的な・行為様式である」（『職業社会学』岩波書店，22頁）という定義に従うこととする。この概念に加え、われわれは保育がもつ特性を「保育を把握する視点」として七項目用意した。これらをまとめ整理したのが、表1「職業としての『保育』を捉える枠」である。

本研究は、保育（＝職業としての）の内容に関し、つぎの三点から考察をすすめることにしている。

1. 「職業」としての「保育」を学生がどう捉えていくか
2. 「保育者」であるための条件を学生はどう認識しているか
3. この条件を、学生は自ら満しているかどうかの自己評価

上記の具体的内容については、第一報（『前掲書』）に詳しく述べているが、本稿では、後出表9・職業としての「保育」の把握、表16・保育者の条件の各項目がそれを示している。

第二の問題は、上述の内容を学生は、何を契機きっかけとし、どのような段階を経て把

表1 職業としての「保育」を捉える枠

職業の 三要素 「保育」を 把握する視点			A 経 済	B 社 会	C 個 人
			生 計 の 維 持	役 割 の 実 現 社 会 へ の 貢 献	個性の発揮・個人の能力
個 人	個人的 資 質	(イ) 属 性 (ロ) 業 績 (ハ) パーソナリティ			性・年齢・体力 知識・技術・免許・資格 情緒・情操・個性・協調性
		(ニ) 子 ども 観			子どもとの接触視点 ('好き'・愛情)
社 会	社会的 評 価	(ホ) 待 遇 (ヘ) 期 待 (コ) 印 象	経済的待遇(収入)	社会的使命・意義 職業のイメージ	

注:「職業の三要素」は、尾高邦雄『職業社会学』岩波書店、松島静雄「職業」(『教育社会学辞典』東洋館出版)

握していくのかという過程である。その契機や段階については、さまざまなものが考えられるが、われわれは、幼稚園教諭普通2級免許取得のための教育実習と保育資格取得のための保育実習(以下、両者を合わせて単に「実習」とよぶ)を契機と考え、それによって段階を設定することとした。

2. 調査の概況

調査の方法として、① 同一学生を二ケ年間調査とし、② 実習終了時(4回の実習がある)並びに卒業時に同一の内容をもつ質問をして、それぞれの時点の比較する。すなわち、二ケ年間の時系列的変化をみるものである。上記①、②の詳しい説明や、その他の調査技法は第一報に詳しく述べているので、ここでは省略する。

表2 調査の概要

	調査時期	在 籍 学 生 (A)	調査票記入 の学生数 (B)	回 収 率 B/A	実 習 の 状 況
I・第1回調査	昭和54年7月	290人	270人	93.1%	一年次6月に幼稚園と保育所で1日ずつ見学実習
II・第2回調査	昭和55年5月	289人	187人	64.7%	一年次末(2月)保育所で3週間実習
III・第3回調査	昭和55年7月		256人	88.6%	二年次前期(6月)幼稚園で3週間実習

注:在籍学生数は、昭和54年は7月1日現在、55年は4月1日現在である。

さて、本稿で取り扱う内容の調査の概要は表2に示すとおりである。今報告は、第一回調査（入学してはじめての実習・幼稚園と保育所の各一日ずつの見学実習の終了時）＝Ⅰ時点、第二回調査（一年次末、保育所三週間実習を終了した時）＝Ⅱ時点、第三回調査（二年次前半期に幼稚園三週間実習を終了した時）＝Ⅲ時点を比較した資料をまとめたものである。

3. 卒業後の進路希望

〈掲載資料〉

表3 免許・資格取得の希望

表4 卒業後の進路——「保育者」として働らくかどうか

表5 卒業後の進路（2）——就職希望先種別

表6 卒業後の進路（3）——就職希望先種別×設置主体別

表7 就職希望先の変化

表8 職業の継続の見とおし

本論にはいる前に、保育科入学の学生が、卒業後にどのような進路を希望しているか、それがⅠ、Ⅱ、Ⅲ時点でどのように変化しているかを概観しておこう。

表3は、幼稚園教諭（普通2級）免許（以下単に「免許」とよぶ）や保育資格（同じく「資格」とよぶ）取得の希望を聞いたものである。これによれば、ほとんどすべての学生が免許と資格の両方取得することを希望しており、入学時のⅠ時点から、Ⅲ時点と同様の高率を示している。

つぎに、卒業したら「保育者」として働くかどうかの卒業後の進路を問うているのが表4である。約9割が保育者として「働らく」と答え、ⅠからⅢの過程でわずかながら増加している（87.4%→90.6%）。しかし、「働かない」層も、Ⅰ時点では1.1%であったものがⅢ時点では4.3%になるなど増加しているのである。これとは逆に、保育者として「働く」か「働かない」か「未定」であるのはⅠの10.4%からⅢの4.7%へと減少している。

表3 免許・資格取得の希望

		幼稚園教 員免許の み	保育資格 のみ	幼免・保 資両方	免許・資 格はいら ない	未 定	計
Ⅰ	実 数	4	0	265	0	1	270
	%	1.5	—	98.1	—	0.4	100.0
Ⅱ	実 数	1	1	185	0	0	187
	%	0.5	0.5	99.0	—	—	100.0
Ⅲ	実 数	2	0	254	0	0	256
	%	0.8	—	99.2	—	—	100.0

表4 卒業後の進路——「保育者」として働くかどうか

		働 く	働かない	未 定	考えてい ない	NA	計
I	実 数	236	3	28	2	1	270
	%	87.4	1.1	10.4	0.7	0.4	100.0
II	実 数	164	7	16	0	0	187
	%	87.7	3.7	8.6	—	—	100.0
III	実 数	232	11	12	0	1	256
	%	90.6	4.3	4.7	—	0.4	100.0

これらの数値の動きは、卒業後、保育者として「働く」あるいは「働かない」の進路・意志決定が、実習を経験することによりだんだん明確になってきていることを示すものであろう。(こうした意志決定が実習だけでなされるのではないことは言うまでもない。その要因としては講義やゼミナール、その他多くのものが考えられる。ただ、本稿では実習にしたがって設定した時点での比較を行なっているものであり、各時点(とくにⅡとⅢ)の数値に実習が作用していると捉えて差し支えないと考えている。この問題は、本研究にとって非常に重大であり、したがって別稿において詳しく論じる予定である。)

卒業後、保育者として「働く」ばあい、幼稚園、保育所そして施設(=保育所を除くその他の児童福祉施設、以下も同じ)のいずれに就職することを希望するかは、表5にみるとおりである。

「幼稚園へ就職したい」は 30.9%→24.4%→39.7%,「保育所へ就職したい」は 25.8%→56.7%→50.0% と増加している。「施設」はずっと 3% を保っており、どこへ就職したいか「まだわからない」が、35.6%→14.6%→4.3% と減少している。

ここで指摘できることの第一点は、「まだわからない」層が大幅に減少し、それに対応

表5 卒業後の進路(2)——就職希望先種別

	I		II		III	
	実 数	%	実 数	%	実 数	%
幼 稚 園	73	30.9	40	24.4	92	39.7
保 育 所	61	25.8	93	56.7	116	50.0
施 設	7	3.0	6	3.7	7	3.0
まだわからない	84	35.6	24	14.6	10	4.3
考えていない	11	4.7	1	0.6	7	3.0
計	236	100.0	164	100.0	232	100.0

注: 表4の「保育者として働く」と回答したものの就職希望先種別を分類した。

して、「幼稚園」と「保育所」が伸びており、とくに「保育所」の伸びは著しいということである。しかし、幼稚園と保育所がともに伸びているとはいっても、Ⅰ時点からⅡ時点、Ⅲ時点へと順調な伸びを示してはおらず、そこには増減の波がみられるということに注目しておかねばならない。つまり、幼稚園はⅡで一旦減少するが幼稚園実習を経験したあとのⅢでは大きく上昇している。一方、保育所は保育所実習を終えたⅡで2倍以上に伸びるが、しかしⅢで若干低下するのである。このように、就職希望先の決定については実習がその契機=きっかけとして作用していることが分るのである。

それぞれの職種での希望を設置主体別にみたのが、つぎの表6である。Ⅰの時点では、幼稚園、保育所とも「公立」を希望しているが、Ⅲ時点では幼稚園の「公立」が大幅に後退し、「私立」希望者が大幅に増える。一方、保育所では、「公立」が順調に増えつづけ、Ⅲで保育所希望のうち86%が「公立」を志向している。保育所の「公立」志向は、入学時から強く、Ⅱ、Ⅲ時点へと移るにつれてますますその傾向を強めてきていることがこの資

表6 卒業後の進路(3)——就職希望先種別×設置主体別

		Ⅰ (54・7)		Ⅱ (55・5)		Ⅲ (55・7)	
		実 数	%	実 数	%	実 数	%
幼稚園	公 立	31	42.5	17	41.5	16	17.4
	私 立	14	19.2	11	26.8	59	64.1
	どちらでもよい	15	20.5	9	22.0	12	13.0
	まだわからない	13	17.8	3	7.3	4	4.4
	NA	0	—	1	2.4	1	1.1
	計	73	100.0	41	100.0	92	100.0
保育所	公 立	37	60.7	62	66.7	100	86.2
	私 立	2	3.3	5	5.4	7	6.0
	どちらでもよい	9	14.8	15	16.1	9	7.8
	まだわからない	12	19.7	11	11.8	0	—
	NA	1	1.5	0	—	0	—
	計	61	100.0	93	100.0	116	100.0
施 設	公 立	3	42.9	2	33.3	2	28.6
	私 立	0	—	0	—	0	—
	どちらでもよい	2	28.5	1	16.7	3	42.8
	まだわからない	1	14.3	2	33.3	1	14.3
	NA	1	14.3	1	16.7	1	14.3
	計	7	100.0	6	100.0	7	100.0

注：前出表5で幼稚園、保育所、施設を希望したものを対象としている。

料から分るのである。

つづいて、Ⅰ時点での希望職種はⅢ時点でどのように変化しているかを、つぎの表7でみておこう。表7は、Ⅰ時点での希望者がⅢ時点でどこに分散したかをみるものである。表によれば、「幼稚園」の43.8%、「保育所」の63.9%がⅢの時点でも希望=意志をかえていない。「施設」については、希望=意志をかえていないものは少ない(28.6%)。また、「未定」からは、「幼稚園」と「保育所」へとそれぞれ30.9%、46.4%移っている。ここでも、実習を経た「幼稚園」や「保育所」への希望はより増えてきていることが分るのである。

さいごに、職業の継続の見とおしについてみることにしよう。就いた職業を「生涯の仕事」として続けるか、「子どもが生まれるまで」とするかなどの見とおしである(表3)。

表7 就職希望先の変化

Ⅰ (54・7)		Ⅲ (55・7)		
就職希望先	実数	就職希望先	実数	%
幼稚園	73	幼稚園	32	43.8
		保育所	23	31.5
		施設	0	—
		未定	2	2.8
		N・A	16	21.9
		計	73	100.0
保育所	61	保育所	39	63.9
		幼稚園	13	21.3
		施設	1	1.7
		未定	2	3.3
		N・A	6	9.8
		計	61	100.0
施設	7	施設	2	28.6
		保育所	4	57.1
		幼稚園	0	—
		未定	1	14.3
		N・A	7	—
		計	7	100.0
まだわからない (未定)	84	幼稚園	26	30.9
		保育所	39	46.4
		施設	2	2.4
		未定	5	6.0
		N・A	12	14.3
		計	84	100.0

注：Ⅰ回調査での希望先がⅢ回調査ではどう変化したかを時系列的に比較している。

表 8 職業の継続の見とおし

	Ⅰ (54・7)		Ⅱ (55・5)		Ⅲ (55・7)	
	実 数	%	実 数	%	実 数	%
生涯の仕事として続けたい	37	15.7	36	21.9	63	27.2
結婚するまで働きたい	11	4.7	5	3.1	8	3.4
子どもが生まれるまで働きたい	16	6.8	8	4.9	18	7.8
出産後一時やめて子どもが大きくなったらまた働きたい	71	30.1	34	20.7	53	22.8
とにかく働いてみてそれから考える	78	33.0	63	38.4	78	33.6
ほかに適当な仕事（職業）が見つかるまで続ける	1	0.4	0	—	0	—
わからない	10	4.2	13	7.9	4	1.7
NA	17	5.1	5	3.1	8	3.4
計	236	100.0	167	100.0	232	100.0

Ⅰ時点からⅢ時点へかけていずれの時点において高い比率を示しているのは「とにかく働いてみてそれから考える」というものであり、33.0%→38.4%→33.6%と推移している。第Ⅱ時点で比率が高まっているが、第Ⅲ時点で第Ⅰ時点と同じレベルに下がっている。これにたいして「生涯の仕事として続けたい」とするものが15.7%→21.9%→27.2%と着実に増加しているのが注目される。「出産後一時やめて子どもが大きくなったらまた働きたい」というものは第Ⅰ時点にくらべて第Ⅱ、第Ⅲ時点では大きく落込んでいる。

4. 職業としての「保育」の把握

〈掲載資料〉

表 9 職業としての「保育」の把握

表 10 職業としての「保育」の把握 (2)——順位の比較 (1位から6位まで)

表 11 職業としての「保育」の把握 (3)——幼稚園就職希望者

表 12 職業としての「保育」の把握 (4)——保育所就職希望者

表 13 職業としての「保育」の把握 (5)——施設就職希望者

表 14 職業としての「保育」の把握 (6)——幼稚園就職希望者・順位の比較

表 15 職業としての「保育」の把握 (7)——保育所就職希望者・順位の比較

学生は、職業としての「保育」をどのように捉えていっているか、表9の18項目が職業としての「保育」の内容を示すものである。左端のタテ欄「枠組」は、さきの表1における「保育を把握する視点」に該当する。

表によれば、属性—a 3—「男性にも女性と同じように適している」、業績—b 1—「専門知識や技術をより多く必要とする」、子どもとの接触視点—c 1—「肉親に対すると同じような愛情をもつ必要がある」、接触視点—c 2—「子どもが好きでなければつとまらない」、

経済的待遇—d 3—「労働に比して経済的には十分報われていない」、意義・使命—d' 2—「経済的には報われないが社会的使命や期待は大きい」、印象—d'' 3—「地味であり目立たない」などの項目に選択が中心にしている。学生は、職業としての「保育」を、こうした内容をもつものとして、これらのポイントで捉えているのである。

表 9 職業としての「保育」の把握

枠 組		番 号	項 目	Ⅰ (N=270)		Ⅱ (N=187)		Ⅲ (N=256)	
				実 数	%	実 数	%	実 数	%
属 性	a 1	女性にのみ適している	0	—	3	1.6	1	0.4	
	a 2	現代の日本では女性に適している	7	2.6	18	9.6	34	13.3	
	a 3	男性にも女性と同じように適している	131	48.5	110	58.8	164	64.1	
業 績	b 1	専門的知識や技術をより多く必要とする	172	63.7	168	89.8	200	78.1	
	b 2	それほど専門的知識や技術が必要としない	11	4.1	7	3.7	13	5.1	
	b 3	やる気さえあれば専門的知識・技術は要求されない	19	7.0	19	10.2	40	15.6	
子どもとの接触視点	c 1	肉親に対すると同じような愛情をもつ必要がある	199	73.7	175	93.6	215	84.0	
	c 2	子どもが好きでなければつとまらない	235	87.0	177	94.7	243	94.9	
	c 3	子どもが好きかどうかはあまり関係ない	5	1.9	2	1.1	4	1.6	
社会的評価指標	経済的待遇	d 1	他の職業に比べて過分の経済的待遇を受けている	1	0.4	6	3.2	4	1.6
		d 2	労働に見合った経済的待遇を受けている	4	1.5	5	2.7	8	3.1
		d 3	労働に比して経済的には十分報われていない	107	39.6	111	59.4	134	52.3
	意義・使命	d' 1	経済的にも報われ、社会的使命も大きい	16	5.9	11	5.9	18	7.0
		d' 2	経済的には報われないが、社会的使命や期待は大きい	148	54.8	133	71.1	181	70.7
		d' 3	経済的に報われているが社会的意義は小さい	3	1.1	1	0.5	1	0.4
	印象	d'' 1	はなやかで誰もがあこがれる	1	0.4	1	0.5	3	1.2
		d'' 2	外観ははなやかであるが、実態は地味である	30	11.1	38	20.3	57	22.3
		d'' 3	地味であり目立たない	103	38.1	121	64.7	141	55.1

注：1) 回答は選択肢のうち6個を選択する多答式（以下「6つのMA」と記す）。

2) % は総数(=N)に占める比率である。

3) NA は、I=1, II=3, III=2 である。

これらの項目がそれぞれ占める割合は、各時点においてともにより高いものであるが、IからIIへ移るときその数値は大幅に増えている。IIとIIIとではその差はあまりない。

このようなあらわれ、すなわちII・III時点でより数値が高いことは、特定の項目にますます集中してきていることであり、職業としての「保育」のイメージがより明確化し、よりパターン化していることを示すものであろう。

つづいて、表 10 は、これらのうち各時点で 1 位から 6 位までを占める項目をまとめたものである。1 位から 4 位までは各時点とも変わらない。1 位は接触視点—c 2—「子どもが好きでなければつとまらない」、2 位・接触視点—c 1—「肉親に対すると同じような愛情をもつ必要がある」、3 位・業績—b 1—「専門的知識や技術をより多く必要とする」、そして 4 位は意義・使命—d' 2—「経済的には報われないが社会的使命や期待は大きい」となっている。

表 10 職業としての「保育」の把握 (2)——順位の比較 (1 位から 6 位まで)

時点 順位	I (54・7)	II (55・5)	III (55・7)
1	子どもとの接触視点 (c 2)	子どもとの接触視点 (c 2)	子どもとの接触視点 (c 2)
2	子どもとの接触視点 (c 1)	子どもとの接触視点 (c 1)	子どもとの接触視点 (c 1)
3	業 績 (b 1)	専門的知識や技術 (b 1)	業 績 (b 1)
4	意 義・使 命 (d' 2)	意 義・使 命 (d' 2)	意 義・使 命 (d' 2)
5	属 性 (a 3)	印 象 (d'' 3)	属 性 (a 3)
6	経 済 的 待 遇 (d 3)	経 済 的 待 遇 (d 3)	印 象 (d'' 3)

注：表 9 より作成

しかし、5 位と 6 位に各時点と比較すると若干の差異がみられることに注意しておきたい。すなわち、II 時点では、5 位は印象—d'' 3—「地味であまり目立たない」、6 位は経済的待遇—d 3—「労働に比して経済的に十分報われていない」である。これが III 時点においては、5 位・属性—a 3—「男性にも女性と同じように通している」、6 位・印象—d'' 3—となる。

保育所の実習 (II 時点) では、「保育」は「地味」で (—d'' 3—)、「経済的に報われない」(—d —) 職業という社会的評価の認識を得てきている。一方幼稚園実習 (III 時点) では、とくに属性 (—a 3—男にも適している) に注目するようになってきていることが分るのである。

表 11 職業としての「保育」の把握 (3)——幼稚園就職希望者

枠組	番号	項 目	I (N=73)		II (N=40)		III (N=92)	
			実数	%	実数	%	実数	%
属 性	a 1	女性にのみ適している	0	—	1	2.5	0	—
	a 2	現代の日本では女性により適している	2	2.7	6	15.0	14	5.3
	a 3	男性にも女性と同じように適している	33	45.2	23	57.5	64	69.6
業 績	b 1	専門的知識や技術をより多く必要とする	47	64.4	36	90.0	74	80.4
	b 2	それほどの専門的知識や技術を必要としない	1	1.4	1	2.5	5	5.4
	b 3	やる気さえあれば専門的知識・技術は要求されない	5	6.8	3	7.5	14	15.2
子ども接 点との 視 点	c 1	肉親に対すると同じような愛情をもつ必要がある	59	80.8	38	95.0	83	90.2
	c 2	子どもが好きでなければつとまらない	68	93.2	37	92.5	89	96.7
	c 3	子どもが好きかどうかはあまり関係ない	2	2.7	0	—	1	1.1
社 会 的 評 価	d 1	他の職業に比べて過分の経済的待遇を受けている	1	1.4	0	—	1	1.1
	d 2	労働に見合った経済的待遇を受けている	0	—	1	2.5	4	4.3
	d 3	労働に比して経済的には十分報われていない	34	46.6	20	50.0	46	50.0
	d' 1	経済的にも報われ、社会的使命も大きい	3	4.1	1	2.5	9	9.8
	d' 2	経済的には報われないが、社会的使命や期待は大きい	43	58.9	30	75.0	63	68.5
	d' 3	経済的に報われているが、社会的意義は小さい	1	1.4	0	—	0	—
	d'' 1	はなやかで誰もがあこがれる	0	—	0	—	1	1.1
	d'' 2	外観ははなやかであるが、実態は地味である	11	15.1	7	17.5	18	19.6
	d'' 3	地味であり目立たない	25	34.2	30	75.0	53	57.6

注: 前出表 4 の幼稚園就職希望者を対象 (=N)

(6 つの MA)

表 12 職業としての「保育」の把握 (4)——保育所就職希望者

枠組	番号	項 目	I (N=61)		II (N=93)		III (N=116)	
			実数	%	実数	%	実数	%
属 性	a 1	女性にのみ適している	0	—	2	2.2	1	0.9
	a 2	現代の日本では女性に適している	1	1.6	11	11.8	13	11.2
	a 3	男性にも女性と同じように適している	32	52.5	50	53.8	71	61.2
業 績	b 1	専門的知識や技術をより多く必要とする	37	60.7	83	89.2	86	74.1
	b 2	それほど専門的知識や技術を必要としない	3	4.9	3	3.2	7	6.0
	b 3	やる気さえあれば専門的知識・技術は要求されない	3	4.9	12	12.9	21	18.1
子ども接 触と視 点	c 1	肉親に対すると同じような愛情をもつ必要がある	46	75.4	87	93.6	96	82.8
	c 2	子どもが好きでなければつとまらない	51	83.6	89	95.6	106	91.4
	c 3	子どもが好きかどうかはあまり関係ない	1	1.6	1	1.1	3	2.6
社 会 的 評 価	d 1	他の職業に比べて過分の経済的待遇を受けている	0	—	4	4.3	3	2.6
	d 2	労働に見合った経済的待遇を受けている	2	3.3	2	2.2	3	2.6
	d 3	労働に比して経済的には十分報われていない	26	42.6	58	62.4	56	48.3
	d' 1	経済的にも報われ、社会的使命も大きい	5	8.2	6	6.5	6	5.2
	d' 2	経済的には報われないが、社会的使命や期待は大きい	40	65.6	65	69.9	84	72.4
	d' 3	経済的に報われているが社会的意義は小さい	1	1.6	0	—	0	—
	d'' 1	はなやかで誰もがあこがれる	1	1.6	0	—	1	0.9
	d'' 2	外観ははなやかであるが、実態は地味である	7	11.5	22	23.7	28	24.1
	d'' 3	地味であり目立たない	26	42.6	56	60.2	57	49.1

注：前出表 4 の保育所就職希望者を対象 (=N)

(6 つの MA)

表 13 職業としての「保育」の把握 (5)——施設就職希望者

枠組	番号	項 目	I (N=7)		II (N=6)		III (N=7)	
			実数	%	実数	%	実数	%
属 性	a 1	女性にのみ適している	0	—	0	—	0	—
	a 2	現代の日本では女性により適している	0	—	0	—	1	14.3
	a 3	男性にも女性と同じように適している	5	71.4	6	100.0	5	71.4
業 績	b 1	専門的知識や技術をより多く必要とする	5	71.4	5	83.3	6	85.7
	b 2	それほど専門的知識や技術を必要としない	0	—	0	—	0	—
	b 3	やる気さえあれば専門的知識・技術は要求されない	1	14.3	0	—	0	—
子ども接触の視点	c 1	肉親に対すると同じような愛情をもつ必要がある	7	100.0	5	83.3	6	85.7
	c 2	子どもが好きでなければつとまらない	7	100.0	5	83.3	6	85.7
	c 3	子どもが好きかどうかはあまり関係ない	0	—	0	—	0	—
社 会 的 評 価	d 1	他の職業に比べて過分の経済的待遇を受けている	0	—	0	—	0	—
	d 2	労働に見合った経済的待遇を受けている	0	—	0	—	0	—
	d 3	労働に比して経済的には十分報われていない	1	14.3	5	83.3	5	71.4
	d' 1	経済的にも報われ、社会的使命も大きい	0	—	0	—	0	—
	d' 2	経済的には報われないが、社会的使命や期待は大きい	4	57.1	5	83.3	6	85.7
	d' 3	経済的に報われているが、社会的意義は小さい	0	—	0	—	0	—
	d'' 1	はなやかで誰もがあこがれる	0	—	0	—	0	—
	d'' 2	外観ははなやかであるが、実態は地味である	0	—	1	16.7	0	—
	d'' 3	地味であり目立たない	2	28.6	5	83.3	5	71.4

注：前出表 4 の施設就職希望者を対象

(6 つの MA)

表 14 職業としての「保育」の把握 (6)——幼稚園就職希望者・順位の比較

順 位	I	II	III
1	子どもとの 接触視点 (c 2)	子どもとの 接触視点 (c 1)	子どもとの 接触視点 (c 2)
2	子どもとの 接触視点 (c 1)	子どもとの 接触視点 (c 2)	子どもとの 接触視点 (c 1)
3	業 績 (b 1)	業 績 (b 1)	業 績 (b 1)
4	意義・使命 (d' 2)	意義・使命 (d' 2) 印 象 (d'' 3)	属 性 (a 3)
5	経済的待遇 (d 3)		意義・使命 (d' 2)
6	属 性 (a 3)	属 性 (a 3)	印 象 (d'' 3)

注: 表 11 より作成

表 15 職業としての「保育」の把握 (7)——保育所就職希望者・順位の比較

順 位	I	II	III
1	子どもとの 接触視点 (c 2)	子どもとの 接触視点 (c 2)	子どもとの 接触視点 (c 2)
2	子どもとの 接触視点 (c 1)	子どもとの 接触視点 (c 1)	子どもとの 接触視点 (c 1)
3	意義・使命 (d' 2)	業 績 (b 1)	業 績 (b 1)
4	業 績 (b 1)	意義・使命 (d' 2)	意義・使命 (d' 2)
5	属 性 (a 3)	経済的待遇 (d 3)	属 性 (a 3)
6	経済的待遇 (d 3) 印 象 (d'' 3)	印 象 (d'' 3)	印 象 (d'' 3)

注: 表 12 より作成

5. 「保育者」であるための条件

〈掲載資料〉

表 16 「保育者」の条件

表 17 「保育者」の条件 (2)——順位の比較 (1 位から 5 位まで)

表 18 「保育者」の条件 (3)——幼稚園就職希望者

表 19 「保育者」の条件 (4)——保育所就職希望者

表 20 「保育者」の条件 (5)——施設就職希望者

表 21 「保育者」の条件 (9)——幼稚園就職希望者・順位の比較

表 22 「保育者」の条件 (7)——保育所就職希望者・順位の比較

表 16 「保育者」の条件

枠組	番号	項 目	I (N=270)		II (N=187)		III (N=256)	
			実 数	%	実 数	%	実 数	%
属 性	a 1	激しい労働に耐えうる体力	184	68.1	128	68.4	184	71.9
	a 2	女性であること	0	—	0	—	1	0.4
	a 3	できるだけ若いこと	1	0.4	3	1.6	1	0.4
業 績	b 1	教育学や心理学など専門的知識の習得	49	18.1	35	18.7	49	19.1
	b 2	音楽や造形など専門的技術の習得	81	30.0	66	35.3	91	35.5
	b 3	社会的一般常識の習得	106	39.3	62	33.2	69	27.0
免 許 や 資 格	b' 1	免許や資格は必要	63	23.3	40	21.4	38	14.8
	b' 2	免許や資格は必ずしも必要でない	42	15.6	13	7.0	15	5.9
	b' 3	免許や資格は全く必要でない	0	—	1	0.5	1	0.4
パ ー ソ ナ リ テ ィ	c 1	安定した情緒や豊かな情操	225	83.3	171	91.4	225	87.9
	c 2	豊かな個性	25	9.3	34	18.2	42	16.4
	c 3	豊かな協調性	69	25.6	83	44.4	99	38.7
子 ども と の 接 触 の 視 点	d 1	子どもをこよなく愛する心	158	58.5	123	65.8	174	68.0
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度	241	89.3	173	92.5	236	92.2
	d 3	子どもがただ好きという気持	11	4.1	3	1.6	15	5.9

注: 1) 回答は選択肢のうち5個を選択する多答式 (以下「5つのMA」と記す)。

2) % は総数 (=N) に占める比率である。

3) NA は I=1, II= , III= である。

「保育者」であるための条件としては何が必要か。学生がその条件であると考えた内容（学生が条件として選択した項目）は、表 16 に示されている。

属性—a 1—「激しい労働に耐える体力」、知識・技術—b 3—「社会的一般常識の習得」、パーソナリティ—c 1—「安定した情緒や豊かな情操」、同—c 3—「豊かな協調性」、接触視点—d 1—「子どもをこよなく愛する心」、同—d 2—「子どもを深く正しく理解しようとする態度」、などの項目が表 16 では比較的によく選択されている。

この資料から指摘できる点は、つぎのとおりである。まず、各時点に共通してより多く選択された上記の項目は、Ⅰ時点からⅡ・Ⅲ時点に移るにつれその数値（パーセント）を目立って増加させてはいない。前述の、職業としての「保育」の認識（表 9）では、ⅠからⅡへの移行過程で、そのイメージをますます固めていった（選択された項目の占める数値が高くなっていった）のに対して、「保育者」であるための条件のイメージはⅠの時点で、つまり幼稚園・保育所の見学実習を終えた段階ですでに固められており、Ⅲの時点までそれがそのまま持続してきているといえよう（—c 3— はやや例外である）。

つぎに、「保育者」の条件には、「パーソナリティ」と「接触視点」が大層重視されていることである。上記六項目中の四項目がこの枠組から選択されている。

一方、業績枠の知識や技術—b 1—「教育学や心理学など専門的知識の習得」、—b 2—「音楽や造形など専門的技術の習得」の占める割合が低い。この業績の低さはパーソナリティや接触視点の高さに比べて問題となる。それと同時に、前出表 9 では業績—b 1—「専門的知識や技術をより多く必要とする」がかなりの高率を示していたのに対して、これと同じ内容を示すこの二項目の低さは何を意味するのであろうか。この資料は、職業としての専門性の認識（表 9）と、それに従事する人間の資質（＝条件）の認識にはギャップのあることを示すものであろう。（この点の検討は、現職の保育者を対象とした調査資料を必要とする）。

表 17 は、上位 5 位までをまとめた表であるが、これで認識の過程を時系列的にみることにしよう。第 1 位から 4 位までは同じ項目が選択されている。しかし、第 5 位はⅠ時点では知識・技術—b 3—「社会的一般常識の習得」であるのに、Ⅱ・Ⅲ時点ではパーソナリティ—c 3—「豊かな協調性」が現われてきている。Ⅰ時点での —c 3— は第 7 位であった。

表 17 「保育者」の条件（2）——順位の比較（1 位から 5 位まで）

順 位	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
1	子どもとの接触視点 (d 2)	子どもとの接触視点 (d 2)	子どもとの接触視点 (d 2)
2	パーソナリティ (c 1)	パーソナリティ (c 1)	パーソナリティ (c 1)
3	属 性 (a 1)	属 性 (a 1)	属 性 (a 1)
4	子どもとの接触視点 (d 1)	子どもとの接触視点 (d 1)	子どもとの接触視点 (d 1)
5	知 識・技 術 (b 3)	パーソナリティ (c 3)	パーソナリティ (c 3)

注：表 16 より作成

こうした選択をしたことは、学生が実習での保育者との直接的な接触、保育者集団のインテンシブな観察をとおして、保育という営みにおいて、保育現場では、「保育者」は子

表 18 「保育者」の条件 (2)——幼稚園就職希望者

枠組	番号	項 目	I (N=73)		II (N=40)		III (N=92)	
			実数	%	実数	%	実数	%
属 性	1 a	激しい労働に耐えうる体力	46	63.0	30	75.0	69	75.0
	2 a	女性であること	0	—	0	—	0	—
	a 3	できるだけ若いこと	0	—	0	—	1	1.1
業 績	b 1	教育学や心理学など専門的知識の習得	5	6.8	9	22.5	16	17.4
	b 2	音楽や造形など専門的技術の習得	21	28.8	16	40.0	33	35.9
	b 3	社会的一般常識の習得	31	42.5	15	37.5	26	28.3
免 許 或 者	b' 1	免許や資格は必要	19	26.0	10	25.0	13	14.1
	b' 2	免許や資格は必ずしも必要でない	7	9.6	2	5.0	9	9.8
	b' 3	免許や資格は全く必要でない	0	—	1	2.5	0	—
パ ー ソ ナ リ テ ィ	c 1	安定した情緒や豊かな情操	66	90.4	38	95.0	84	91.3
	c 2	豊かな個性	7	9.6	7	17.5	14	15.2
	c 3	豊かな協調性	23	31.5	15	37.5	33	35.9
子 ども と の 接 触 の 視 点	d 1	子どもをこよなく愛する心	46	63.0	21	52.5	61	66.3
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度	64	87.7	36	90.0	85	92.4
	d 3	子どもがただ好きという気持	2	2.7	0	—	6	6.5

注：前出表5の幼稚園就職希望者を対象 (=N)

(5つのMA)

表 19 「保育者」の条件 (4)——保育所就職希望者

枠組	番号	項 目	I (N=61)		II (N=93)		III (N=116)	
			実数	%	実数	%	実数	%
属 性	a 1	激しい労働に耐える体力	49	80.3	69	74.2	81	69.8
	a 2	女性であること	0	—	0	—	0	—
	a 3	できるだけ若いこと	1	1.6	1	1.1	0	—
業 績	b 1	教育学や心理学など専門的知識の習得	11	18.0	16	17.2	23	19.8
	b 2	音楽や造形など専門的技術の習得	15	24.6	32	34.4	40	34.5
	b 3	社会的一般常識の習得	27	44.3	32	34.4	29	25.0
	b' 1	免許や資格は必要	11	18.0	18	19.4	21	18.1
	b' 2	免許や資格は必ずしも必要でない	8	13.1	4	4.3	1	0.9
	b' 3	免許や資格は全く必要でない	0	—	0	—	0	—
パーソナリティ	c 1	安定した情緒や豊かな情操	52	85.2	84	90.3	96	82.8
	c 2	豊かな個性	2	3.3	16	17.2	29	21.6
	c 3	豊かな協調性	13	21.3	44	47.3	41	35.3
子どもとの接触点	d 1	子どもをこよなく愛する心	36	59.0	59	63.4	78	67.2
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度	58	95.1	88	94.6	107	92.2
	d 3	子どもがただ好きという気持	2	3.3	2	2.2	8	6.9

注：前出表 5 の保育所就職希望者を対象 (=N)

(5 つの MA)

表 20 「保育者」の条件(5)——施設就職希望者

枠組	番号	項 目	I (N=7)		II (N=6)		III (N=7)	
			実 数	%	実 数	%	実 数	%
属 性	a 1	激しい労働に耐えうる体力	4	57.1	3	50.0	4	57.1
	a 2	女性であること	0	—	0	—	0	—
	a 3	できるだけ若いこと	0	—	0	—	0	—
業 績	b 1	教育学や心理学など専門的知識の習得	2	28.6	2	33.3	1	14.3
	b 2	音楽や造形など専門的技術の習得	2	28.6	2	33.3	3	42.9
	b 3	社会的一般常識の習得	1	14.3	0	—	0	—
	b' 1	免許や資格は必要	1	14.3	0	—	0	—
	b' 2	免許や資格は必ずしも必要でない	1	14.3	1	16.7	2	28.6
	b' 3	免許や資格は全く必要でない	0	—	0	—	0	—
パーソナリティ	c 1	安定した情緒や豊かな情操	6	85.7	6	100.0	7	100.0
	c 2	豊かな個性	0	—	1	16.7	0	—
	c 3	豊かな協調性	3	42.9	2	33.3	6	85.7
子どもとの接点	d 1	子どもをこよなく愛する心	5	71.4	6	100.0	6	85.7
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度	6	85.7	6	100.0	6	85.7
	d 3	子どもがただ好きという気持	2	28.6	1	16.7	0	—

注：前出表5の施設就職希望者を対象(=N)

(5つのMA)

表 21 「保育者」の条件 (6)——幼稚園就職希望者・順位の比較

順 位	I	II	III
1	パーソナリティ (c 1)	パーソナリティ (c 1)	子どもとの接触視点 (d 2)
2	子どもとの接触視点 (d 2)	子どもとの接触視点 (d 2)	パーソナリティ (c 1)
3	子どもとの接触視点 (d 1) 属 性 (a 1)	属 性 (a 1)	属 性 (a 1)
4		子どもとの接触視点 (d 1)	子どもとの接触視点 (d 1)
5	業 績 (b 3)	業 績 (b 2)	業 績 (b 1) パーソナリティ (c 3)

注: 表 18 より作成

表 22 「保育者」の条件 (7)——保育所就職希望者・順位の比較

順 位	I	II	III
1	子どもとの接触視点 (d 2)	子どもとの接触視点 (d 2)	子どもとの接触視点 (d 2)
2	パーソナリティ (c 1)	パーソナリティ (c 1)	パーソナリティ (c 1)
3	属 性 (a 1)	属 性 (a 1)	属 性 (a 1)
4	子どもとの接触視点 (d 1)	子どもとの接触視点 (d 1)	子どもとの接触視点 (d 1)
5	業 績 (b 3)	パーソナリティ (c 3)	パーソナリティ (c 3)

注: 表 19 より作成

どもへの対応に要する知識や技術よりも、人との「協調」が日常的課題であると見聞してきたことが要因として考えられる。さらに、これは「保育」には、子どもに対する問題と共に保育者どおしで生ぜしめている問題が決して少なくないことを意味しているといえよう。

6. 「保育者」としての適性の自己評価

〈掲載資料〉

表 23 「保育者」としての適性の自己評価

表 24 「保育者」としての適性の自己評価 (2)——幼稚園就職希望者

表 25 「保育者」としての適性の自己評価 (3)——保育所就職希望者

表 26 「保育者」としての適性の自己評価 (4)——施設就職希望者

表 27 「保育者」として「適している」理由

表 28 「保育者」として「適している」理由 (2)——順位の比較

表 29 「保育者」として「適している」理由 (3)——幼稚園就職希望者

表 30 「保育者」として「適している」理由 (4)——保育所就職希望者

表 31 「保育者」として「適している」理由 (5)——施設就職希望者

表 32 「保育者」として「適している」理由 (6)——幼稚園就職希望者・順位の比較

表 33 「保育者」として「適している」理由 (7)——保育所就職希望者・順位の比較

表 34 「保育者」として「適していない」理由

表 35 「保育者」として「適しているかわからない」理由

表 36 「保育者」として「適しているかわからない」理由 (2)——幼稚園就職希望者

表 37 「保育者」として「適しているかわからない」理由 (3)——保育所就職希望者

表 38 「保育者」として「適しているかわからない」理由 (4)——施設就職希望者

表 39 「保育者」として「適しているかわからない」理由 (5)——進路未決定者

表 40 「保育者」の条件×「保育者」としての適性の自己評価

表 41 表 16×表 17

学生は、「保育者」としての適性を自らどのように評価しているであろうか。まず、「保育者」に適しているかどうかについての自己評価を表 23 でみることにしよう。

表の「非常に適している」と「やや適している」の二層を合わせて「適している」とし、「あまり適していない」と「全く適していない」を「適していない」とすれば、「適している」が大幅に増加している。「適していない」もわずかながら増えている。一方、「どちらともいえない(わからない)」層は約半減している。

この数字からも、学生が実習を経験することにより「保育者」として自らの適性をみつめ、「適している」という自己評価を高めてきていることが分るのである。

では、かれらは、どういった点で「適している」と自己評価しているのか。その理由を表 27 にみることができる。ここでは、属性—a 1—「激しい体力に耐えうる体力をもっている」、免許・資格—b' 1—「免許や資格がとれる見込みがある」、パーソナリティ—c 1—「情緒が安定し情操が豊かである」、同—c 3—「豊かな協調性がある」、接触視点—d 1—「子どもをこよなく愛する心をもっている」、同—d 2—「子どもを深く正しく理解しようとする態度を身につけている」、同—d 3—「子どもがただ好きである」が目立っている。

時系列的には、ⅠとⅡ、Ⅲにはかなりの数値の差がみられるが、ⅡとⅢの間では—a 3—、—c 3—の例外を除いて大きな差はない。ここでは、適性の自己評価の理由がパーソナリティと接触視点に集中していることを指摘しておかねばならない。すでに述べた「保育者」であるための条件でもこうした傾向はみられたが、ここでもさらにそれへの強い傾斜を示しているのである。そして、知識や技術(—b 1—、—b 2—)の習得は「適している」理由として大きく避けられているのである。

また、表 28 に明らかなように、業績—b' 1—「免許や資格がとれる見込みがある」が、ⅡとⅢの時点で、「適している」理由の一つになっている点に注目しなければならない。同じ「業績」枠のなかで、知識・技術の数値の低さと対照的である。

Ⅲ時点では、パーソナリティ—c 3—「豊かな協調性」が第4位を占めている点も看過できない。

さいごに、「保育者」であるための条件と上述のその自己評価とを対応させてみることにしよう(表 17×表 28)。すなわち、一般論としての(望ましい)「保育者」像と自己と直接的にかかわる現実の保育像との対比である。表 40、表 41 がこれを示す。

すでに述べているが、まず業績の枠内において両者の差が目立つ。知識・技術では一般論として理想像としての「保育者」にはより強く求められても、自己の適性評価のカウントにはあまり入れていない。免許・資格についてはこの逆の傾向を示している。

表 23 「保育者」としての適性の自己評価

	Ⅰ (N=270)		Ⅱ (N=187)		Ⅲ (N=256)	
	実 数	%	実 数	%	実 数	%
非常に適している	11	4.1	5	2.7	19	7.4
やや適している	79	29.3	64	34.2	124	48.4
どちらともいえない (わからない)	172	63.7	109	58.3	89	34.8
あまり適していない	7	2.6	6	3.2	10	3.9
全く適していない	0	—	1	0.5	0	—
NA	1	0.4	2	1.1	14	5.5

表 24 「保育者」としての適性の自己評価(2)——幼稚園就職希望者

	Ⅰ (N=73)		Ⅱ (N=40)		Ⅲ (N=92)	
	実 数	%	実 数	%	実 数	%
非常に適している	5	6.9	1	2.5	7	7.6
やや適している	21	28.8	15	37.5	50	54.4
どちらともいえない (わからない)	45	61.6	21	52.5	29	31.5
あまり適していない	2	2.7	2	5.0	1	1.1
全く適していない	0	—	0	—	0	—
NA	0	—	1	2.5	5	5.4

注：前出表 5 の幼稚園就職希望者を対象 (=N)

表 25 「保育者」としての適性の自己評価 (3)——保育所就職希望者

	Ⅰ (N=61)		Ⅱ (N=93)		Ⅲ (N=116)	
	実 数	%	実 数	%	実 数	%
非常に適している	3	4.9	4	4.3	9	7.8
やや適している	18	29.5	39	41.9	61	52.6
どちらともいえない (わからない)	40	65.6	49	52.7	36	31.0
あまり適していない	0	—	0	—	3	1.7
全く適していない	0	—	0	—	0	—
NA	0	—	1	1.1	8	6.9

注：前出表 5 の保育所就職希望者を対象 (=N)

表 26 「保育者」としての適性の自己評価(4)——施設就職希望者

	I (N=7)		II (N=6)		III (N=7)	
	実数	%	実数	%	実数	%
非常に適している	1	14.3	0	—	0	—
やや適している	1	14.3	2	33.3	5	71.4
どちらともいえない(わからない)	5	71.4	4	66.7	1	14.3
あまり適していない	0	—	0	—	1	14.3
全く適していない	0	—	0	—	0	—
NA	0	—	0	—	0	—

注: 前出表5の施設就職希望者を対象(=N)

表 27 「保育者」として「適している」理由

枠組	番号	項目	I (N=90)		II (N=69)		III (N=143)	
			実数	%	実数	%	実数	%
属性	a 1	激しい労働に耐えうる体力をもっている	44	48.9	46	66.7	91	63.6
	a 2	女性であるから	0	—	0	—	0	—
	a 3	若いから	0	—	16	23.2	11	7.7
業績	b 1	専門的知識を習得している	0	—	16	23.2	18	12.6
	b 2	専門的技術を習得している	4	4.4	7	10.1	8	5.6
	b 3	社会的一般的常識をもっている	10	11.1	10	14.5	19	13.3
	b' 1	免許や資格がとれる見込みがある	17	18.9	37	53.6	69	48.3
パーソナリティ	c 1	情緒が安定し情操が豊かである	30	33.3	31	44.9	63	44.1
	c 2	個性が豊かである	12	13.3	11	15.9	22	15.4
	c 3	豊かな協調性がある	21	23.3	29	42.0	86	60.1
子どもとの接触視点	d 1	子どもをこよなく愛する心をもっている	63	70.0	56	81.2	127	88.8
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度を身につけている	60	66.7	53	76.8	115	80.4
	d 3	子どもがただ好きである	26	28.9	25	36.2	45	31.5

注: 1) 回答は選択肢のうち5個を選択する多答式(以下「5つのMA」と記す)。

2) %は総数(=N)に占める比率である。

3) 上記総数(=N)は、前出表23の「非常に適している」・「やや適している」に該当するものである。

4) NAはI=0, II=5, III=36である。

パーソナリティにもかなりの開きがみられる。たとえば—c 1—「安定した情緒や豊かな情操」は一貫して理想像においてはるかに高い。しかし、—c 3—「豊かな協調性」は実習を経る度に自己像の方に数値が高まっていく様子が伺える。子どもとの接触視点については、差は認められるもの、ともにかなりの選択をうけている。

このように、同一の枠・項目を用意した「保育者」像を、立場をかえてみたときに、学生のなかでは必ずしも一致していないことが分る。そこには、ズレなりギャップなりが存在しているのである。

表 28 「保育者」として「適している」理由 (2)——順位の比較

順 位	I	II	III
1	子どもとの接触視点 (d 1)	子どもとの接触視点 (d 1)	子どもとの接触視点 (d 1)
2	子どもとの接触視点 (d 2)	子どもとの接触視点 (d 2)	子どもとの接触視点 (d 2)
3	属 性 (a 1)	属 性 (a 1)	属 性 (a 1)
4	パーソナリティ (c 1)	業 績 (b' 1)	パーソナリティ (c 3)
5	子どもとの接触視点 (d 3)	パーソナリティ (c 1)	業 績 (b' 1)

注：表 27 より作成

表 29 「保育者」として「適している」理由 (3)——幼稚園就職希望者

枠 組	番号	項 目	I (N=26)		II (N=16)		III (N=57)	
			実 数	%	実 数	%	実 数	%
属 性	a 1	激しい労働に耐えうる体力をもっている	12	46.2	10	62.5	36	63.2
	a 2	女性であるから	0	—	2	12.5	2	3.5
	a 3	若いから	0	—	1	6.3	5	8.8
業 績	b 1	専門的知識を習得している	0	—	4	25.0	7	12.3
	b 2	専門的技術を習得している	2	7.7	3	18.8	4	7.0
	b 3	社会的一般的常識をもっている	5	19.2	4	25.0	10	17.5
パ ー ソ ナ リ テ ィ	b' 1	免許や資格がとれる見込みがある	4	15.4	10	62.5	36	63.2
	c 1	情緒が安定し情操が豊かである	13	50.0	12	75.0	22	38.6
	c 2	個性が豊かである	5	19.2	0	—	7	12.3
子 ども と の 接 触 視 点	c 3	豊かな協調性がある	7	26.9	5	31.3	35	61.4
	d 1	子どもをこよなく愛する心をもっている	22	84.6	12	75.0	53	93.0
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度を身につけている	17	65.4	14	87.5	44	77.2
	d 3	子どもがただ好きである	9	34.6	2	12.5	13	22.8

(5 つの MA)

注：1) (N) は前出表 24 の「非常に適している」「やや適している」の該当者。

2) NA は I=1, II=1, III=11 である。

表 30 「保育者」として「適している」理由 (4)——保育所就職希望者

枠 組	番号	項 目	I (N=22)		II (N=43)		III (N=70)	
			実 数	%	実 数	%	実 数	%
属 性	a 1	激しい労働に耐えうる体力をもっている	12	54.6	30	69.8	43	61.4
	a 2	女性であるから	0	—	1	2.3	3	4.3
	a 3	若いから	0	—	11	25.6	7	10.0
知 識 ・ 技 術	b 1	専門的知識を習得している	0	—	11	25.6	9	12.9
	b 2	専門的技術を習得している	2	9.1	4	9.3	4	5.7
	b 3	社会的一般的常識をもっている	5	22.7	4	9.3	8	11.4
業 績	b' 1	免許や資格がとれる見込みがある	6	27.3	22	51.2	27	38.6
	c 1	情緒が安定し情操が豊かである	13	59.1	15	34.9	32	45.7
	c 2	個性が豊かである	5	22.7	7	16.3	11	15.7
パ ー ソ ナ リ テ ィ	c 3	豊かな協調性がある	6	27.3	21	48.8	43	61.4
	d 1	子どもをこよなく愛する心をもっている	22	100.0	34	79.1	63	90.0
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度を身につけている	17	77.3	33	76.7	58	82.9
子 ども と の 接 触 の 視 点	d 3	子どもがただ好きである	9	40.9	18	41.9	28	40.0

注: 1) (N) は前出表 25 の「非常に適している」、「やや適している」の該当者。

2) NA は, I=1, II=2, III=4 である。

(5 つの MA)

表 31 「保育者」として「適している」理由 (5)——施設就職希望者

枠 組	番号	項 目	I (N=2)		II (N=2)		III (N=5)	
			実 数	%	実 数	%	実 数	%
属 性	a 1	激しい労働に耐えうる体力をもっている	1	50.0	1	50.0	3	60.0
	a 2	女性であるから	0	—	0	—	0	—
	a 3	若いから	0	—	0	—	0	—
知 識 ・ 技 術	b 1	専門的知識を習得している	0	—	1	50.0	2	40.0
	b 2	専門的技術を習得している	0	—	1	50.0	0	—
	b 3	社会的一般的常識をもっている	0	—	0	—	0	—
	b' 1	免許や資格がとれる見込みがある	0	—	1	50.0	2	40.0
業 績	c 1	情緒が安定し情操が豊かである	0	—	0	—	3	60.0
	c 2	個性が豊かである	0	—	1	50.0	2	40.0
	c 3	豊かな協調性がある	0	—	0	—	3	60.0
パ ー ソ ナ リ テ ィ	d 1	子どもをこよなく愛する心をもっている	2	100.0	2	100.0	4	80.0
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度を身につけている	0	—	2	100.0	4	80.0
	d 3	子どもがただ好きである	1	50.0	1	50.0	2	40.0

注: 1) (N) は前出表 26 の「適している」、「やや適している」の該当者である。

(5 つの MA)

表 32 「保育者」として「適している」理由(6)——幼稚園就職希望者・
順位の比較

順 位	I	II	III
1	子どもとの接触視点 (d 1)	子どもとの接触視点 (d 1)	子どもとの接触視点 (d 1)
2	子どもとの接触視点 (d 2)	子どもとの接触視点 (d 1) パーソナリティ (c 1)	子どもとの接触視点 (d 2)
3	パーソナリティ (c 1)		属 性 (a 1) 業 績 (b' 1)
4	属 性 (a 1)	属 業 性 (a 1) 業 績 (b' 1)	
5	子どもとの接触視点 (d 3)		パーソナリティ (c 3)

注: 表 29 より作成

表 33 「保育者」として「適している」理由(7)——保育所就職希望者・
順位の比較

順 位	I	II	III
1	子どもとの接触視点 (d 1)	子どもとの接触視点 (d 1)	子どもとの接触視点 (d 1)
2	子どもとの接触視点 (d 2)	子どもとの接触視点 (d 2)	子どもとの接触視点 (d 2)
3	パーソナリティ (c 1)	属 性 (a 1)	属 業 性 (a 1) パーソナリティ (c 3)
4	属 性 (a 1)	業 績 (b' 1)	
5	子どもとの接触視点 (d 1)	パーソナリティ (c 3)	パーソナリティ (c 1)

注: 表 30 より作成

表 34 「保育者」として「適していない」理由

枠組	番号	項 目	I (N=7)		II (N=7)		III (N=10)	
			実数	%	実数	%	実数	%
属 性	a 1	激しい労働に耐えうる体力をもっていない	2	28.6	2	28.6	7	70.0
	a 2	女性でないから						
	a 3	若くないから	0	—	1	14.3	0	—
業 績	b 1	専門的知識を習得していない	3	42.9	4	57.1	4	40.0
	b 2	専門的技術を習得していない	1	14.3	4	57.1	7	70.0
	b 3	社会的一般的常識をもっていない	3	42.9	2	28.6	4	40.0
パ ー ソ ナ リ テ ィ	b' 1	免許や資格がとれる見込みがない	1	14.3	1	14.3	0	—
	c 1	情緒が安定せず情操が豊かでない	1	14.3	1	14.3	7	70.0
	c 2	個性が豊かでない	0	—	2	28.6	3	30.0
子 ども と の 接 触 の 視 点	c 3	豊かな協調性がない	1	14.3	4	57.1	6	60.0
	d 1	子どもをこよなく愛する心をもっていない	4	57.1	5	71.4	3	30.0
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度を身につけていない	6	85.7	4	57.1	7	70.0
	d 3	子どもが好きでない	2	28.6	2	28.6	0	—

注: 1) 回答は選択肢のうちから5個を選択する多答式。

2) % は総数(=N)に占める比率である。

3) 上記総数(=N)は、前出表 23 の「全く適していない」の該当者である。

表 35 「保育者」として適しているか「わからない」理由

	I (N=172)		II (N=109)		III (N=98)	
	実数	%	実数	%	実数	%
自分の性格や適性を十分に理解していない	52	30.8	27	24.8	19	21.4
保育者として必要な能力を十分に習得していない	81	47.1	67	61.5	57	64.0
保育者であるための必要条件を十分に理解していない	25	14.5	8	7.3	8	9.0
その他	10	5.8	7	6.4	5	5.6
N A	3	1.7	0	—	0	—

注: 1) % は総数 (=N) に占める比率である。

2) 上記の総数 (=N) は前出表 23 の「どちらともいえない(わからない)」の該当者である。

表 36 「保育者」として適しているか「わからない」理由 (2)——幼稚園就職希望者

	I (N=45)		II (N=21)		III (N=29)	
	実数	%	実数	%	実数	%
自分の性格や適性を十分に理解していない	10	22.2	7	33.3	4	13.8
保育者として必要な能力を十分に習得していない	26	57.8	10	47.6	21	72.4
保育者であるための必要条件を十分に理解していない	7	15.6	1	4.8	2	6.9
その他	0	—	3	14.3	2	6.9
N A	2	4.4	0	—	0	—

表 37 「保育者」として適しているか「わからない」理由 (3)——保育所就職希望者

	I (N=39)		II (N=49)		III (N=36)	
	実数	%	実数	%	実数	%
自分の性格や適性を十分に理解していない	12	30.8	2	4.1	9	25.0
保育者として必要な能力を十分に習得していない	23	59.0	40	81.6	20	55.6
保育者であるための必要条件を十分に理解していない	4	10.2	5	10.2	6	26.7
その他	0	—	2	4.1	1	2.7
N A	0	—	0	—	0	—

表 38 「保育者」として適しているか「わからない」理由 (4)——施設就職希望者

	Ⅰ (N=5)		Ⅱ (N=4)		Ⅲ (N=1)	
	実 数	%	実 数	%	実 数	%
自分の性格や適性を十分に理解していない	1	20.0	2	50.0	0	—
保育者として必要な能力を十分に習得していない	3	60.0	2	50.0	1	100.0
保育者であるための必要条件を十分に理解していない	1	20.0	0	—	0	—
そ の 他	0	—	0	—	0	—
N A	0	—	0	—	0	—

表 39 「保育者」として適しているか「わからない」理由 (5)——進路未決定者

	Ⅰ (N=83)		Ⅱ (N=17)		Ⅲ (N=5)	
	実 数	%	実 数	%	実 数	%
自分の性格や適性を十分に理解していない	31	37.3	5	29.4	2	40.0
保育者として必要な能力を十分に習得していない	29	34.9	10	58.8	3	60.0
保育者であるための必要条件を十分に理解していない	12	14.5	1	5.9	0	—
そ の 他	10	12.1	1	5.9	0	—
N A	1	1.2	0	—	0	—

表 40 「保育者」の条件と「保育者」になるための適性の自己評価

枠組	番号	項 目	I		II		III	
			「保育者」の条件	自己評価	「保育者」の条件	自己評価	「保育者」の条件	自己評価
属 性	a 1	激しい労働に耐えうる体力	68.1	48.9	68.4	66.7	71.9	63.6
	a 2	女性であること	—	—	—	—	0.4	—
	a 3	できるだけ若いこと	0.4	—	1.6	23.2	0.4	7.7
知識・技術	b 1	教育学や心理学など専門的知識の習得	18.1	—	18.7	23.2	19.1	12.6
	b 2	音楽や造形など専門的技術の習得	30.0	4.4	35.3	10.1	35.5	5.6
	b 3	社会的一般常識の習得	39.3	11.1	33.2	14.5	27.0	13.3
免 許・ 資 格	b' 1	免許や資格は必要	23.3	—	21.4	—	14.8	—
	b' 2	免許や資格は必ずしも必要でない	15.6	18.9	7.0	53.6	5.9	48.3
	b' 3	免許や資格は全く必要でない	—	—	0.5	—	0.4	—
ペー ソナ リテ ィ	c 1	安定した情緒や豊かな情操	83.3	33.3	91.4	44.9	87.9	44.1
	c 2	豊かな個性	9.3	13.3	18.2	15.9	16.4	15.4
	c 3	豊かな協調性	25.6	23.3	44.4	42.0	38.7	60.1
子 ども も 接 触 の 視 点	d 1	子どもをこよなく愛する心	58.5	70.0	65.8	81.2	68.0	88.8
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度	89.3	66.7	92.5	76.8	92.2	80.4
	d 3	子どもがただ好きという気持	4.1	28.9	1.6	36.2	5.9	31.5

注: 1) 表15と表26の再掲

2) 自己評価の欄の免許・資格は取得見込みがある者の比率である。

表 41 表 17×表 28 (1 位から 5 位まで)

順位	I		II		III	
	望ましい 保育者像	自己像	望ましい 保育者像	自己像	望ましい 保育者像	自己像
1	子どもとの 接触視点 (d 2)	子どもとの 接触視点 (d 1)	子どもとの 接触視点 (d 2)	子どもとの 接触視点 (d 1)	子どもとの 接触視点 (d 2)	子どもとの 接触視点 (d 1)
2	パーソナリティ (c 1)	子どもとの 接触視点 (d 2)	パーソナリティ (c 1)	子どもとの 接触視点 (d 2)	パーソナリティ (c 1)	子どもとの 接触視点 (d 2)
3	属性 (a 1)	属性 (a 1)	属性 (a 1)	属性 (a 1)	属性 (a 1)	属性 (a 1)
4	子どもとの 接触視点 (d 1)	パーソナリティ (c 1)	子どもとの 接触視点 (d 1)	業績 (b' 1)	子どもとの 接触視点 (d 1)	パーソナリティ (c 3)
5	知識・技術 (b 3)	子どもとの 接触視点 (d 1)	パーソナリティ (c 3)	パーソナリティ (c 1)	パーソナリティ (c 3)	業績 (b' 1)

おわりに

以上は、『保育』の認識過程に関する研究」のさきの第一報に続く中間報告である。このあと、二回の調査並びに卒業後の数次の追跡調査を予定している。とりあえず、卒業までに二回の調査を行ない、二ヶ年の保育科課程で学生が「保育」を認識していく過程を明らかにしたいと思っている。

この段階で結論を述べることはできないがつぎの二点をここでは指摘することはできよう。

- ① 実習をととしての現場での体験（子どもや保育者との直接的な接触）が、「保育」の認識を固めると。
- ② またその体験が、新たな認識（＝視点）を可能にすること。
- ③ 「保育」の認識は、立場や観点をかえると、同一の枠内の判断でもズレが生じ、必ずしも一致しないこと。

尚、本稿の一部は第 19 回全国保母養成協議会研究大会（於金沢・昭和 55 年 11 月 23 日）において報告し、そこで貴重など助言を得た。

たみあき げん（社会学）

こばやし かつや（社会福祉学）